



大正



だより 8.9月号



子らの声

戻れば校舎も

目を覚ます

校長
小林
崇

子どもたちの元気な声が学校に戻ってきました。夏休み中の学校はしーんとしていて「眠っている。」という表現がぴったりですが、夏休みが明けて一気に目覚めた感じです。夏休み中の学校では職員研修や授業の準備、廊下のワックスがけや敷地内の草刈り、業者による施設の点検や修繕などが行われ、主役である子どもたちを迎える準備を十分に行いました。

私の毎週の楽しみの一つに大河ドラマがあります。特に戦国時代を舞台にしたものは興味深く、今回の豊臣兄弟をテーマにした物語は、新たな視点で史実が描かれており、思わず引き込まれる展開が続いています。主役はもちろん、脇を固める個性豊かな戦国武将にもそれぞれの伏線となるエピソードがあり、あれこれ思いを馳せながら視聴しています。その戦国の世にひとときわ特異な存在感を示すのが徳川家康です。家康というと「タヌキおやじ」などとも言われ、狡猾な一面が強調されることもありますが、戦国の世を忍耐と幸運で切り抜け、天下人となったイメージもあります。そんな家康の姿を見るたびにいつも思い出す話があります。

幼少の徳川家康が、駿河の国を治めていた今川義元の人質だった頃の話です。今川義元は、幼い家康の秀でた才覚を見抜き、「このまま成長していけば、いずれ面倒な相手になるに違いない。」と考えるようになり、家臣に次のように命令しました。

「竹千代(家康の幼名)には

最も『おごい(残酷・ひどい)教育』をしてやれ。」

家来たちは、その日からまだ幼い竹千代に、粗食のみを与え、水もわずかししか飲ませず、早朝から深夜まで、休憩も最小限に、水練・剣術・槍術・馬術・学問に厳しく励ませ、修行僧のように鍛錬していきました。

しばらくして義元は家来に「おごい教育」はどうなっているか尋ねます。家来が、竹千代に行っている厳しい教育の一部始終を得意げに報告すると、義元は怒り、「おごい教育」について、改めて次のよう指示しました。

「寝たいときはいつでもいくらでも寝かせよ。」「学問が嫌ならさせるな。」「贅沢なご馳走を好きなだけ食わせろ。」「嫌がることはさせるな。」「本人の望むことは何でも与えてやれ。」

そして、義元は最後にこう言いました。

「そうすりゃ、たいがいの人間は駄目になる。」

肉体的・精神的な厳しさを与えること以上に、好き勝手な振る舞いや贅沢を許し、必要以上に甘やかすことこそが『おごい教育』だということです。現代は戦国時代ではありませんが、子どもが将来、自分一人でも生きていける力を身に付けさせ、自立できるようにしていくことが大人の役割であることに、変わりありません。そのためには、我慢できる心、すぐに結果が出ないことにも粘り強く取り組む気概、不十分な環境下でも工夫する力が必要です。この話は子どもの成長を支える上で大人がどのように関わるべきかを考えさせてくれる、大切な示唆に富んだエピソードだと感じています。

ちなみに竹千代は、今川義元の思惑通りにはならず、学問や武術に勉学に励み、やがては天下人となることになります。幼いながらも自分を律する姿勢に感心した義元は、竹千代を駄目人間にすることを諦めたということです。史実がはっきりしないこともあるので、脚色混じりのエピソードかもしれませんが、多くの人に知ってもらいたい話です。

さて、今年の夏休みの課題には、それぞれの学年に応じ「自分で選んだ○○」というものがありました。自分で選び、自分で決めたことに対して、粘り強く工夫しながら取り組むことができたでしょうか。この夏の取組をしっかり振り返り、その経験を次の目標へと繋げてほしいと思います。